高橋たか子

白い光

白い光

昭和五十三年四月二十八日初版発行

定価一、二〇〇円

著者　高橋たか子

発行者　増永和也

発行元　悠想社
〒240横浜市保土ヶ谷区川辺町四—二
—一四一七☎〇四五（三三三）一〇九五

発売元　㈱青也書店
〒113東京都文京区本郷三—四〇—三
☎〇三（八一二）七二〇一

印刷所　共同印刷

© Takako Takahashi　1978 Printed in Japan
乱丁・落丁はお取りかえ致します。
0093—222401—3859

高橋たか子

白い光

悠想社

装幀　高橋たか子
　　山岸　義

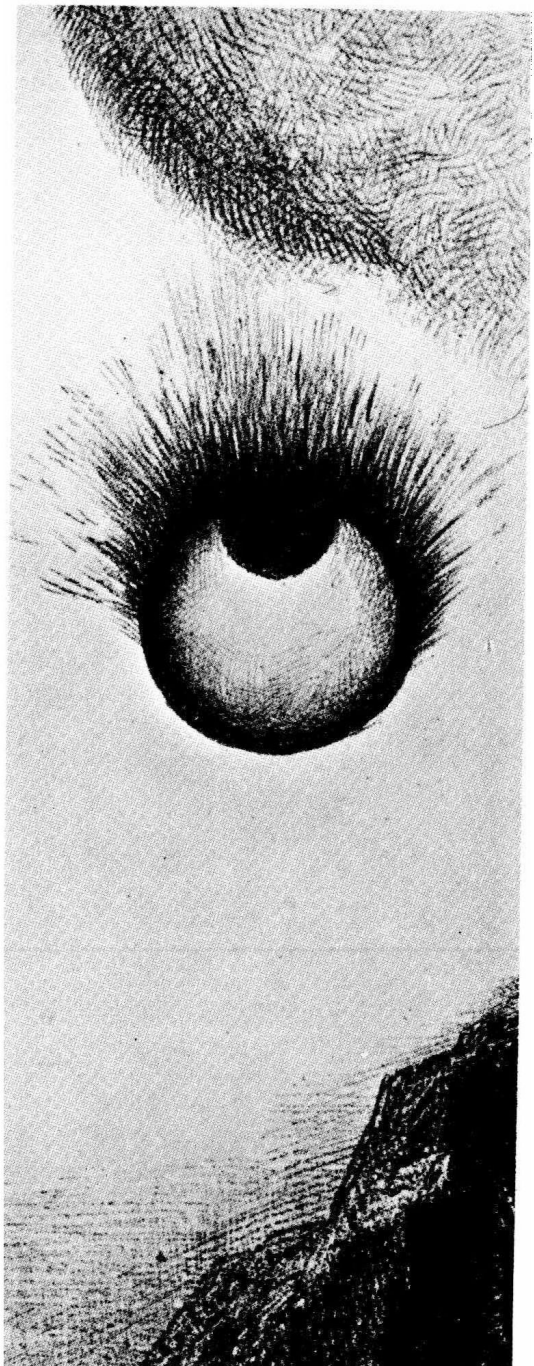
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

プロローグ　9
第一話　フラワー・ガーデンの一日　19
第二話　白い服の男　49
あとがき　74

プロローグ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



私はその頃、アルコール中毒者であった。アルコールから逃れようにも逃れることのできぬ日夜が、二年ほど続いたのであった。

事の始まりは強度のノイローゼのせいである。ノイローゼの原因については語らない。大体、原因というものは、人があずかり知らぬことかもしれないからである。のっぺらぼうのような存在が、人の熟睡している間に、その頭に錐できりきり孔をあけて、けしの実を一粒、そっと落しこむと、人は調子が狂いだす。けしの実にふくまれている毒が、軀にいきわたる間、人はずっと狂っていて、それが消化され終ると、ケロリと治ってしまう。そのようなものだと私は思いたい。第一、人が決してあずかり知ることのない原因というものがあると考えるほうが、思考の快楽になるではないか。

私はよく街路を一人でふらふら歩いていたものだ。そんな時、前方から、多くの人がこちらへむけて歩いてくる。一人歩きの人もあれば、アヴェックもあり、五、六人の若いグループもあり、家族もある。ああっ来るな、と思いはじめると、もう彼らは、どうしようもなく私にむかって来るのであった。同時に、彼らはただの歩行者ではなくなってしまう。彼らがどんな仕合せそうな顔附きをしていても、そんな外向きの覆いの下にかくされている不仕合わせを、私の病んだ視覚はありありと見てしまうのだ。彼らは、それを重たくかかえ持つふうにして、なにか強引な気配とともに、ぐんぐん近寄ってくる。

彼らが私と擦れちがう時、私には彼らが私を通りぬけるような気がするのだった。肉体と肉体とは決してぶつかることはないので、もしかしたら、彼らは肉体をもっているが、私は肉体がなくて、陽炎のような存在として歩いていたのかもしれない。そして彼らが私の中を歩いていく時、彼らの不仕合わせな内面は、否応なく私に吸い取られていく。私はいわば他人の不仕合わせの吸い取り紙。インキを吸い取りすぎて、ぼってりと重たい。それでも容赦なく、彼ら

は街路の前方から、つぎつぎと現われて、私をめざして迫ってくる。私は或いはまた、他人の内面の預かり人。他人は私を通りぬける時、荷物を預けるようにして、内面を預けると、私の背後に去っていくのである。そうすると、彼らの内面の不仕合わせは全部、私のなかに溜っていき、私はそれを余儀なく一人でかかえ持たされて歩いていかねばならない。疲れが高じてくる。空は翳ってくる。そうなのだ、私は見知らぬ他人の影の部分をいれる容器。世界じゅうの影を引き受けさせられて歩いていく。どこまで行っても、彼らは私にむかって来た。

アルコールが体内にある時には、誰も自分の不仕合わせを私になすりつけていく人はいなかった。第一、街路で出会う人々は、すこしも不仕合わせをかかえているとは見えなかった。むしろプラスチックのように輝やいている場合さえある。そんな光明は私の内面から射していて、彼らを覆っていると思われた。

最初は、ちょっと疲れを意識した時に、一升瓶から日本酒をガラスのコップにいっぱい注いで、ぐいと、水薬でも飲むように飲むだけだった。或る日、い

つか飲んだことのある、チンザノのはいったカクテルの快い苦みを思い出した。それが中毒に踏みこむ第一歩だったといえるだろう。ちょうど輸入品の洋酒が出まわりはじめた頃だったので、私はさまざまな洋酒を買いもとめて味を試みてみた。やはりチンザノの苦みが気に入った。だが、オン・ザ・ロックでは甘すぎる。炭酸ソーダで割り、ジンを滴らせて、例のカクテルの味を記憶のなかで探りながら、自分流にカクテルをつくった。口当りがいいので、一日に何度か飲むようになった。まもなくチンザノは子供の飲物のように思えてきて私から離れた。ジンと炭酸ソーダとでは、どこか味の収斂するところがないので、ジンとコカコーラに変え、それにレモンをしぼって入れた。これが、いろいろ試みた上で私の到達した、最高の飲物となったのだ。コカコーラに混ぜるジンの量が日に日に多くなっていったのはいうまでもない。

そういうわけでこの飲物に一日じゅう浸るという仕儀になったのである。毎日、形ばかりの朝食が終るとすぐ、アルコールの旅が始まるのだった。旅といういいかたは、この場合、さほど不自然ではない。なぜなら、第一に、家のな

かのどこか或る位置と、アルコールが置かれている台所との間を、私は一日に何回となく往復することになったからであり、第二に、アルコールのおかげで、私は架空の国をしばしば旅することができたからである。そんな旅はいつも光の暈につつまれているのであった。

だが、それだけでは結構な話に聞えるだろう。事実は、アルコールに深入りするとともに、なぜか私のなかで罪悪意識が強まっていったのだ。とはいっても、そもそも罪悪意識などというものは何に由来するのだろう。それもまた、人が決してあずかり知ることのない原因にかかわりがあるのだろうか。のっぺらぼうのような存在が、私の頭に錐できりきり孔をあけて、そこに落しこんだ、あのけしの実の毒の効果が、アルコールによって緩和されたと思ったのは束の間の錯覚で、毒はむしろアルコールによって何倍もの強さになり、私のなかを奔放に流れだすようになったのである。

私は自分で調合したあの最高の飲物を、自己嫌悪とともに飲むようになった。つまりそんな形で、私は何者かに罰せられているのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com